

日本学術会議総合工学委員会・臨床医学委員会合同
放射線・放射能の利用に伴う課題検討分科会（第25期・第2回）議事要旨

1. 日時 令和4年3月14日（月）15:00～17:00
2. 会場 遠隔会議（オンライン会議）
3. 参加者 神田玲子、柴田徳思、中野隆史、神谷研二、竹田敏一、青木茂樹、井上優介、
岡沢秀彦、佐治英郎、多胡正夫、中嶋英雄、東達也、内堀幸夫（敬称略）

4. 議事内容

1) 学術会議の意志の表出などに関する手続きの改正について

柴田委員長から資料2、3に基づき学術会議の新しい意思の表出等の作成手続について説明があった。意思を表出するカテゴリーについての概説の後、分科会としては、「見解」、「報告」として意思の表出が可能であること、及び、従来と異なり、これからは意思の表出後もフォローアップ・レポートとインパクトレポートを提出する必要があることが述べられた。また、第三部査読等の手順の概要について説明があり、見解を発出する場合は、「個別分野のみに関わり学協会等で代替可能ではないか」という点に留意する必要があることが指摘された。

2) 放医研のサイクロトロン事故概要

内堀氏より放医研のサイクロトロン事故概要と今後の対応について説明があった。令和3年11月26日（金）にQST放医研の千葉地区サイクロトロン棟地下1階電源室に設置された大型サイクロトロンメインコイル用電源装置付近から火災が発生し、周辺のケーブル類に延焼した。公設消防による放水によって、約2時間後に鎮火が確認され、けが人等の発生はなかった。大型サイクロトロン用各種電源・電源ケーブル類は大きく損傷しており、修復に時間がかかる予定。大型サイクロトロン本体の損傷状況は確認中、小型サイクロトロンについては、早期の復旧を検討中。サイクロトロンの今後の対応については、将来計画も見据え、ワーキンググループを設置し検討中であることが報告された。

3) 小委員会の活動報告

放射性医薬品用のRIを国内で製造できる専用の加速器を備えた研究拠点が必要であり、核医学分野の大型計画として提案するために小委員会を設置した。柴田委員長より資料7に基づき小委員会で提言として纏めた「核医学分野における放射性薬剤の研究開発・製造拠点の整備」について説明があった。また、20期からこれまでに発出した関連する提言について紹介があった。

4) 核医学分野の拠点の整備に関する今後の活動について

学術会議の意思を表出する方法が変わり、提言を発出する場合は、「個別分野のみに関わり学協会等で代替可能ではないか」等に留意する必要がある。しかし、今回纏めた提言は、核医学分野に限られているため、提言として発出するのは、難しいのではないかと指摘が柴田委員長よりあった。これを受け、分科会として小委員会で纏めた内容を基に意思の表出を行う方策について議論した。以下の意見が出た。

(1) 「放射性医薬品製造拠点と研究開発」の枠組みで、書き方を修正して「見解」として纏め直す。

要点は、以下の2点である。

- ・陽子25MeVサイクロトロンでAc-225の世界の製造拠点になることができる。
- ・後段加速用のサイクロトロンで50MeV重陽子を生成し我が国が必要とするMo-99の半分を国産化する。

書き変えに当たっては東先生の協力を仰ぐ。

(2) 今後の記載の改善点として以下のコメントがあった。

- ・国内で放射性同位元素が使用できなかった実例を記載し、それ故、国産化が必要であると書いた方が説得力があるのではないか。
- ・カナダからモリブデンの入手ができなくなり、Tc-99mの製造もできず医療現場で不足を生じた。

- ・建設予定のサイクロトロンの特長を書いた方が良い。
 - ・加速器は、研究用のみならず、商用にも使用できる可能性を書いた方が良い。
 - ・QST 加速器の火災事故についての記載は、事故の復旧状況を踏まえて記載した方が良い。
 - ・工学分野が使用する可能性も視野に入れたら良いのではないかな。
- (3) 「提言」と「見解」の違いについて説明があり、現在は移行期でもあるので、この度纏めた「提言」も担当部署に相談し助言を得ることで、「提言」として発出できる可能性もあるのではないかなとの指摘があった。その際は、このテーマでのシンポジウムの開催状況や異なる意見に対する対応を検討する必要がある。
- (4) 原子力・放射線の利用に関し、学会全体で議論する必要があるのではないかな。
- (5) 放射線同位元素を国内で確保する必要性は、今まで以上に高くなったのではないかな。

以上の様な議論を踏まえ、次回までに「見解」として纏めることになり、次の分科会では、作成された「見解」について検討することとなった。